



飛翔レビュー！

『おぎ・もぎ対談 「個」育て論』 茂木健一郎 尾木直樹 青灯社

尾木直樹
×
おぎ・もぎ対談
茂木健一郎
「個」育て論

メディアによって一般に広く知られた学者二人が語る、現在の日本の教育の実態。子どもの個性と本質的な知を蝕んでいる偏差値教育。ぼっち飯、大学の楽園化、Fラン大学、モンスターペアレント。教育界におけるあまたあふれる諸問題を取り上げ、理想的な教育現場について探求する。対談形式の口語体で書かれており読みやすく、肉声で語られたメッセージが直接文字となって届いてくる。彼らが共有する、日本の教育への“怒り”そして子どもたちへの“愛”が込められた一冊。26生 中森慎介

『人狼 ザ・ライブプレイングシアター』

13名が言葉を尽くし、千変万化の物語をアドリブで紡ぐ舞台演劇です。出演者がルールに用いるのは、皆さんご存知の人気パーティーゲーム『人狼』。脚本はオープニング以外存在せず、開演直前に13枚のカードで決まる役職に従い人間 vs 人狼の戦いを役者達は即興で行います。ベーシックな「村」の他にも「宇宙」「魔女」「深海」など戦いの場において様々なコンセプトがあり、飽きずに観ることができます。様々な魅力が詰まった無限の可能性を持つライブ・エンターテインメントです。“これより始まるは……今において他にない、たった一度の物語” 26生 関よしの

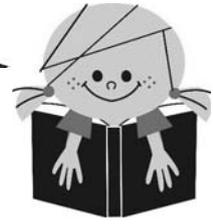
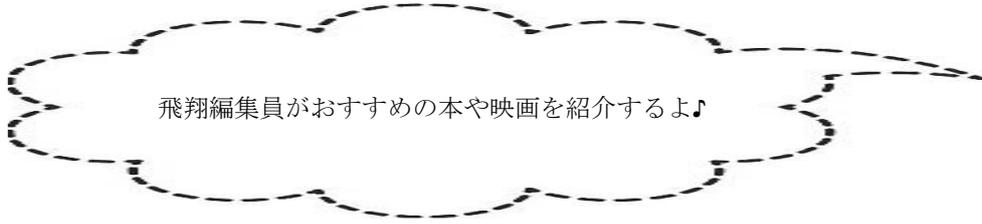
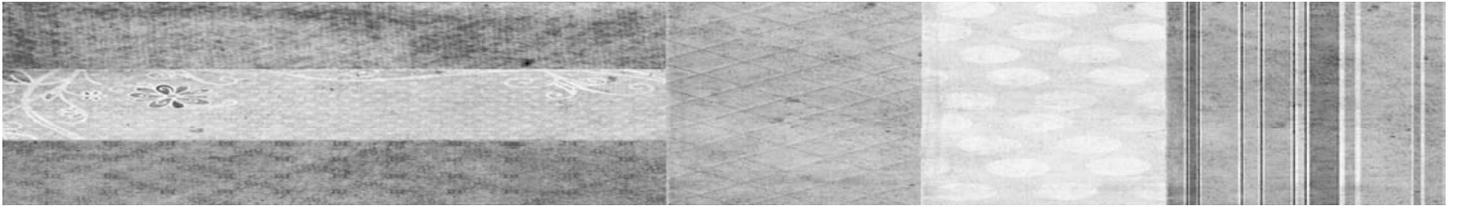


『勝負論 ウメハラの流儀』(梅原大吾 小学館新書)



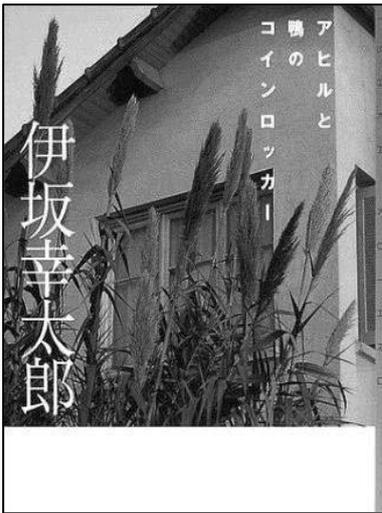
日本人初のプロゲーマーで、世界で最も長く賞金を獲得しているゲーマーとしてギネス記録に登録されている梅原大吾の二冊目の著書。本著では彼が“ストリートファイター”シリーズに代表される、格闘ゲームという真剣勝負の世界で培ってきた、考え方や物事に対する実践的な取り組み方が書かれている。今や海外の大学や一般企業での講演依頼をされるほど、彼の考え方は普遍的で現代人に必要とされている。目先の勝ち負けに揺さぶられず、将来自分を最も成長させる方法などスポーツやビジネスにも通用する、生き方のエッセンスを得られる一冊。彼の半生とどのようにして今の彼が形作られたかを綴った一冊目の著書である『勝ち続ける意志力(小学館)』もお勧めしたい。 26生 中森慎介





飛翔編集員がおすすめの本や映画を紹介するよ♪

『アヒルと鴨のコインロッカー』伊坂幸太郎



アヒルと鴨の違い、みなさんは知っていますか。アヒル、鴨、そしてコインロッカー。これらは物語の中でキーワードというほどのものではないものの、物語に不思議な余韻を与えています。私はそう思います。主人公は大学生。アパートの隣人と出会い、なぜか一緒に本屋を襲うことになってしまいます。でもそれは物語の中の一部でしかないのです。本当の物語はその過去に…。この作品は映画化されたのでご存知の方も多いかもかもしれません。私は本を読んだ後すぐに映画を観ました。なぜすぐ観たかという、どうやって映像化できるのだろう、映像にしてしまったらバレーではないか、と思ったからです。そして、映画を観た後の感想は、ずるい！です。気になりませんか？小説も映画もどちらもおすすめです。

26生 網野瑞貴



『かもめ食堂』群ようこ

舞台はヘルシンキのある街角。そこに、昔から夢だった自分の店をオープンしたサチエ。名前は「かもめ食堂」。看板メニューは彼女が心を込めて握る「おにぎり」という、ちょっと変わったお店。そしてここに集まる人も普通だけど変わっていて、どこか愛おしいキャラクターばかり。日本おたく（ガッチャマン大好き）のトンミ君に、平凡な人生に嫌気がさしてひょいとフィンランドまで飛んできたミドリとマサコ、毎日仏頂面でお店をにらみつけるけど、本当は入りたくて仕方なかった地元のおばさん…。それぞれの人生がここ「かもめ食堂」で交差し、ゆっくりと流れていく様子が、なんともほっこりして癒されます。そして、読み終わったあとは「よし！今日も1日がんばろうかな！」と思えるような一冊です。ぜひ、天気の良い日にゆっくり読んでみてください。26生 石川佳奈



飛翔な日々 〈飛翔編集員のつぶやき〉

「私のバイトライフ」(26生 岡田菜緒)

私がバイトを始めて早五か月になる。

一か月目でバイトへの憧れと理想が消え現実を知り、二か月目でミスを大量発生させ店長からの電話を恐れる日々を経験し、

三か月目で仕事に慣れてきて態度の悪いお客様や電話対応が悪いお客様の対応の仕方を覚え、

四か月目で少しずつ仲良くなってきたパートのおばちゃんと愚痴をこぼしながら仕事をし、

五か月目で働いている自分すごいなあとうぬぼれつつもバイトを辞めたいニートに戻りたいという矛盾を抱えながら店長に「バイトを辞めることを考えているのですが…」といったら店長を切れさせ、

そして迎える記念すべき半年目で留学のため一時バイトをお休みし、これを機会にニートに戻れるのかなと期待していたところでの店長のこの一言。

「留学から帰ってきたらまたよろしく↑いまこ。」

お金を稼ぐことの大変さと仕事への責任感を感じつつ、春からの私のバイトライフが幕を上げる…。

「無趣味な人へ プロ野球編」(26生 柴山真一)

無趣味な若者が多いと聞く。

以下は私の浅薄な人間関係の中での勝手な思い込みだけでも、総科の学生にもそういう人は多いのではないか。平日はレポートやアルバイトに忙殺され、せつかくの休みもSNSなんかをしているうちに無為に空費してしまい、ああ俺の生きがいつて何なんだろうなんて言っただけで一日が終わる。生きがいという言い過ぎかもしれないが、趣味というのは要するに自由な時間の中でいかに自らを楽しませるかということだと思う。あくまで己一人で、独善的に求め究めていくところに面白味があるのであって、そこには多くの思考と判断が伴わなくてはならない。換言すれば、これは非常に創造的な営みである。無趣味なことを創造力の欠如とすれば、それは現代において既成の枠組みのなかで何者かに掌握される生き方を余儀なくされることを意味するのであって云々。前置きが長くなったが、読者諸賢のなかにもそういった悩みを抱える方もあろうかと思つて何か参考に趣味としての実例を挙げたい。

私の趣味と言えそうなものの中で、ここに書いても比較的差し障りがないように思われるプロ野球についてでも書いておこうか。ともかく、ファン球団というのは各々持つことだろう。無ければ横浜を。毎日、スポーツニュースでその日のファン球団の試合結果を確認する。勝っていたらぬか喜びする。負けたら一通り悔しがったあとポジ要素を探して寝る。これだけでも単調な生活に彩りがもたらされるのである。もちろん時間があればテレビやインターネットで中継を見る。そこに繰り広げられるプライドをかけた真剣勝負の熱さ、一球毎に何が起るか分からない緊迫感、それゆえにチャンスやピンチの場面では思わず息を詰めて祈らざるを得ない。名手たちが見せる併殺完成やホームラン

の描く軌道の美しさにも魅了されることだろう。そうしていくと自然と肩入れする選手が出てくる。野球が他のスポーツと決定的に異なっているのは、打率や防御率など個人の成績が数字としてはつきり出てくるところだ。これを見て我々はその選手がどのように、どれだけ活躍しているかを判断し議論できる。チームプレイでありながら個人のキャラクターが重要視されるこの二面性が非常に面白いところで、最良の選手の成績を追ったり、最良の打順の組み合わせ等議論したりとますます飽きることがない。あとは応援歌を覚えるとか、球場に行つて観戦してくるとか、白ノリ黒ノリ・男村田・横浜を出る喜びといったプロ野球ネタを解すとかするともうプロ野球を趣味と公言して憚らないレベルといえるのではないか。

「独りよがりの子の癖」(26生 竹内音寧)

先日とあるカフェのカウンター席から窓の外を見てみると、ピンクのリボンがついた小包を持っている女の子を見つけた。眉間にしわを寄せてきよろきよろしていたので、ちよつと不思議な子だと思ひ興味を抱いた私は、その子を観察することに決めた。

遅めのバレンタインだろうかと乙女のような妄想を駆け巡らせていると、彼女のもとへ宅配サービスのお兄さんがやってきた。お兄さんは、どうやら彼女に長方形の箱を渡しに来たようである。対して彼女は、小包を持つてはいるものの背中に手を回してそれを隠していた。渡さないのだろうか：彼女には申し訳ないが、このもどかしさが正直たまらない。

私の陰からの応援も甲斐なく、彼女はお兄さんに深々お礼をしただけで、結局

小包は渡されなかった。小包を眺めて溜息をついている様子を見るに、やはりそのお兄さんに渡したかったようである。

そんな健気な彼女にある変化が見受けられた。観察初めにあつた眉間のしわがなくなつていたので。というのも、彼女が受け取つたのはメガネとそのケースだったようで、視界が戻つたからか彼女の表情は明るくなつていたので。

笑顔でその場を離れていく彼女を眺めつつ現実逃避をしていた私だが、その時この物語を伝える相手が隣になかつたもので、突然自分が独りであることに気づかされた。一人でカフェに行くことが趣味なのだが、大体最後は現実に引き戻される。

まさか飛翔の日々でこのストーリーを語ることになるとは…と思ひながら無表情で文字を打ち込んでいるわけだが、まあこんな日も悪くない。

「日常」(26生 尾関寛之)

私たちの世界には日々いろいろなことが起こり多くの人たちの感情であふれている。

皆さんはご存じだろうか。「世界五分前仮説」という言葉を。それは、私たちの世界は実は五分前に始まつたのかもしれないという仮説です。これを確かめるのは不可能であるのもしかしたら本当のことかもしれない。そう考えたら面白いし、私たちが一生懸命生きているこの世界は非常にほかないものだと思います。でも、結局は今を一生懸命生きようというありふれた言葉にいきつくのです。そんなこんなであつたという間に二セメも終わりもう少しちゃんとしておけばよかつたと思う自分とやりきつた気持ちであふれている自分の二人が存在して

いて、もどかしい気持ちであふれています。春休みには何か新しいことにチャレンジしたいと思っっているのですがあと一歩踏み出せずに、結局は何もせずこのまま春休みが終わってしまいうです。まあ、このような自分の失敗談をつらつらと書くのもどうかと思うので二つほど最近の出来事で自分の心に響いたことを書いて締めくりたいと思います。

まず一つ目は、先日自分のバイト先の某古本屋に外国人のお客さんがいらして英語でケータイの使い方がわからないので教えてほしいと言われたのですが、自分はまだ英語がしゃべれないので先輩にすぐに任せてしまいました。この時に英語がペラペラしゃべればかっこいいと思いました。ということと少しづつ英語の勉強をしていきたいなと感じた日でした。

二つ目は、後藤健二さんについての記事を最近見たのですが、そこに書いてあったのが、

「後藤健二さんって知ってる？」

「あー殺されちゃった人でしょ？」

ではなくて、

「命がけで世界の紛争地域の状況を日本に伝えて捕まった日本人も助けようとした人だよな？すげーよな。」

ってなってる。

と書かれていてかなり心に響きました。

「歩くこと」 (26生 宮里洋志)

最近よく散歩をする。散歩とはいっても、学校とかバイト先から自転車があるのに歩いて帰ったりとか、少し離れたコンビニまで歩いて行ったりとか、そのくらいのことだ。いつも決まっちゃってちよっと寂しげな音楽を聴きながら、普通の人も少し早いくらいのペースで歩く。

でも、いつもはバスとか、自転車で通過する道も、その3分の1から10分の1くらいしかないスピードで通ると今まで見えなかったものが見えてくる気がする。正直なところ、まだそんなものは見つけたことがないけど、いつか誰も気がつかないようなものが見つけられるのではないかと期待している。

考えてもみれば、世の中は本当に便利で、人間が楽に生活できるようになった。そのせいで一体どれだけの人が「歩くこと」をしなくなったのだろうか。家から100mもないところまで自動車で行ったり、止むを得ず歩くことになるように「疲れた」とこぼす。便利さを享受しているのは自分も同じなのだけれど、人類が進化の過程でせっかく手に入れた「二足歩行」歩くこと」をもっと試みてはどうだろうか。

レポートに行き詰まったり、嬉しいことがあったり、逆に悲しいことがあったり、何も面白くないときでも、もしかしたらふらっと歩いている間に、レポートの画期的なアイデアが浮かんだり、嬉しいことがより嬉しくなる出来事が起こったり、悲しみを忘れられたり、何か面白い発見があるかもしれない。自分はそんな思いを「歩くこと」に寄せている。